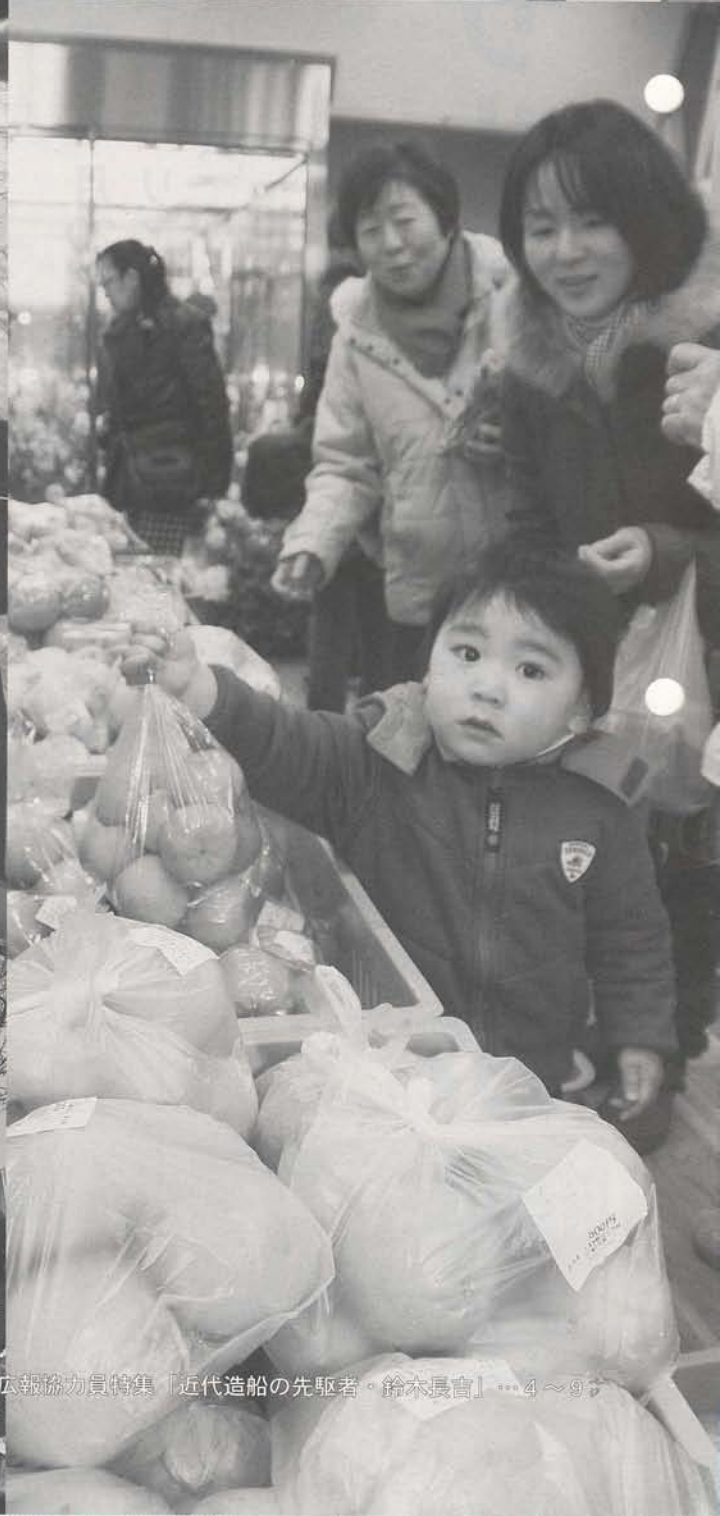


# 広 報 かわづ

March 3  
2010年 No.451



人、モノ、情報が  
集う場所  
(河津桜観光交流館始動)



江戸から明治へ。日本の歴史が大きく動いた時代  
咸臨丸かんりんまるに乗船した河津出身の一人の船大工がいました。

その人の名は、鈴木長吉。

近代造船の先駆者

長吉の歩んだ時代を振り返りながら  
その足跡を、民間広報協力員が追いました。

民間広報協力員特集

# ある船大工の足跡

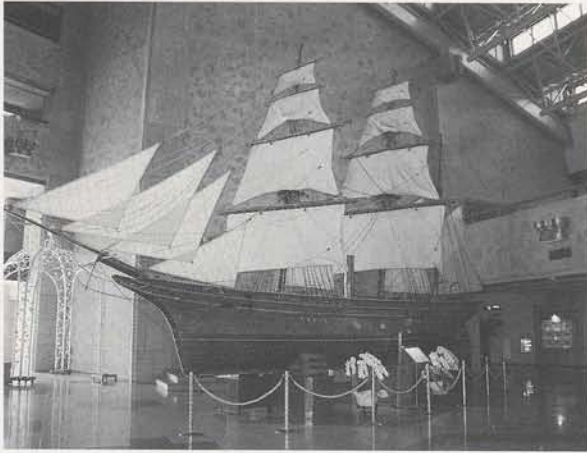
近代造船の先駆者

鈴木長吉



# 河津出身の 船大工

時代考証に基づき、5分の1の縮尺で  
正確に再現した咸臨丸の模型  
(ホテルジャパン=下田市吉佐美=提供)



時は幕末、ペリー来航を契機に開国へ向かう日本。四方を海に囲まれた地理的条件から、近代的な海軍を創設することが急務となり、西洋式蒸気軍艦の建造が重要な国策となっていく。鈴木長吉は、船大工としてまさにこの時代に活躍しました。時代が長吉を必要としていたのかもしれない。しかし近代造船の先駆者となたえられながらも、その功績はあまり知られていません。

## 船大工としての道のり

鈴木長吉は文政元(1818)年、現在の河津町浜で生まれました。幼少期については詳しい資料がなく不明ですが、長吉が成人した当時、浜地区は浦賀奉行の管轄でした。長吉は、浦賀奉行に派遣され、船大工としての人生を歩み始めました。

船大工としてその腕を磨き始めた長吉は、浦賀の幕府造船所で洋式軍艦『鳳凰丸』、戸田(現在の沼津市)で『戸田号』などの建造に携わることになります。そして、幕府が設立した長崎海軍伝習所の1期生に選抜されました。

## 長崎海軍伝習所1期生

長崎海軍伝習所は、安政2(1855)年、近代海軍養成のために幕府が設立した教育機関です。

各藩から選抜された青年たちが、オランダ人教師から西洋技術・航海術・蘭学などを学びました。長吉はこの伝習所の1期生に選ばれました。ほかに、勝麟太郎(勝海舟)

や鈴藤勇次郎、石井修三、小野友五郎、戸田の上田寅吉(虎吉)ら日本を代表する人物がいました。

伝習所は、外国人から組織的に西洋の技術、軍事訓練を学んだ歴史上日本最初の学校で、海軍だけではなく、医学養成所、製鉄所が三位一体となった日本の近代化の曙ともいわれています。

ここを巣立った彼らは明治維新のさまざまな分野で大きな役割を果たしました。

## より高い技術の追求へ

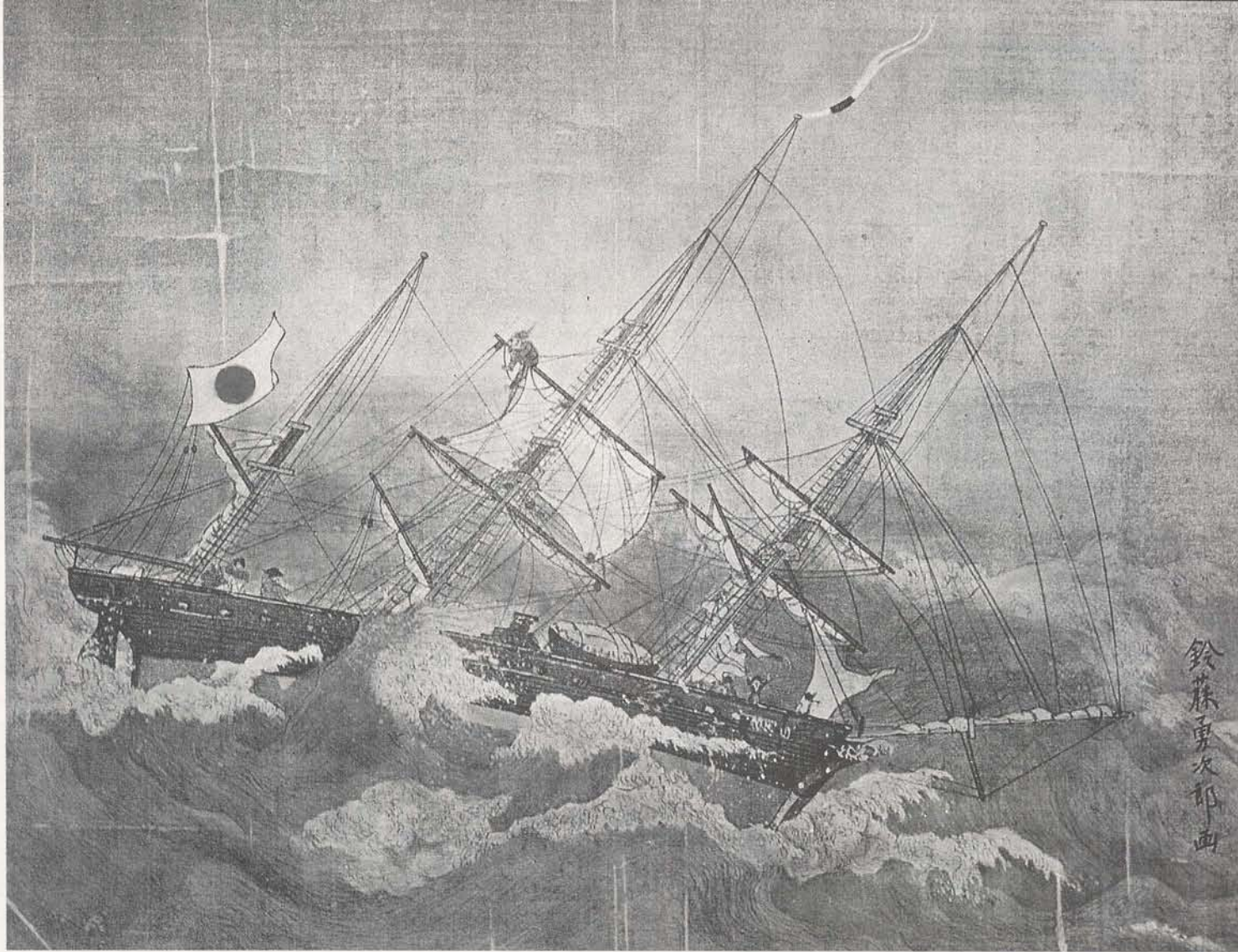
安政4(1857)年4月11日、江戸築地の講武所(旗本たちのための武芸・砲術などの軍事訓練機関)内に幕府が新しく軍艦操練所を創設しました。伝習所を修了した1期生の中からさらに厳しい選抜を経て、長吉は職方(役職名)としてここに就任。

操練所は、長崎海軍伝習所以上に日本海軍・船舶海運の育成に大きくかかわっています。

ここでの仲間が、後に咸臨丸で太平洋横断の偉業を達成したのです。



写真に残る鈴木長吉  
河津の地で生まれ、船大工の道を歩んだ鈴木長吉。写真には、近代造船の先駆者として名を馳せた長吉の凛とした姿が写しだされています。



「咸臨丸難航図」 鈴木勇次郎 原画・木村家所蔵（横浜開港資料館提供・保管）  
当時の渡航の荒々しさがうかがえる一枚。この船に乗り長吉はアメリカへ渡った

# かん りん まる 咸臨丸で初の 太平洋横断

長崎海軍伝習所修了後、同じく幕府が江戸築地に開設した軍艦操練所で職方（役職名）として仕えた長吉。その後、勝海舟が艦長で知られる咸臨丸で太平洋往復を果たしました。長吉43歳の時でした。

## 勝海舟らとともに乗船

咸臨丸は安政7（1860）年1月19日、浦賀を出航しアメリカに向かいました。幕府の船として初めて太平洋を横

### 鈴木長吉が乗船・建造に携わった主な船

船名	竣工など	建造場所	種類	旧名/排水量※	その他
鳳凰丸	1853年起工 1854年竣工	浦賀大ケ谷	帆船	—	帆に黒い横縞が描かれている
戸田号（君沢形）	1855年3月竣工	君沢郡戸田村	帆船	— 75トン	安政東海地震による津波で大破したロシア軍艦ディアナ号の代船として建造
観光丸	1850年起工 1853年竣工	オランダ	外輪式蒸気船	スンピン号 353トン	1855年オランダ国王ウィレム3世から13代将軍徳川家定へ贈呈された
咸臨丸	1855年起工 1857年竣工	オランダ	スクリュー式蒸気船	ヤーバン号 620トン	オランダに発注した練習艦
千代田形	1862年起工 1866年竣工	石川島造船所	蒸気軍艦	— 140トン	初の国産蒸気式軍艦

## 鈴木長吉氏のあゆみ

1818	現在の河津町浜に生まれる	【国内の主な動き】 (1825) 異国船打私令を發布
1837	成人後、船大工棟梁、東浦賀の勘左衛門か西浦賀の重五郎のいづれかの弟子になったと推測される	(1853) ペリー来航 浦賀大船建造許可令
1854	『鳳凰丸』竣工	(1854) ペリー来航 下田安政の大地震
1855	『戸田号』竣工	
1855	長崎海軍伝習所へ派遣される。	
1857	長崎留学前ころ、帯刀(一刀差し)を許されたと推測される	
1860	軍艦操練所職方御雇	(1858~59) 安政の大獄
1866	『千代田形』竣工	(1860) 桜田門外の変
1868	苗字帯刀(二本差し)を許される	(1864) 池田屋事件
1870	横須賀製鉄所に仕える	(1867) 大政奉還 (1868) 元号 明治へ
1872	造船三等中手(工部省)として仕える。横須賀で在籍のまま病没。55歳の生涯を閉じる	

断したのです。

その船には、艦長に勝麟太郎(勝海舟)、運用方に鈴木勇次郎、測量方に小野友五郎、蒸気方に肥田浜五郎、通弁方にジョン万次郎、木村喜毅司令官(軍艦奉行)の従者として福澤諭吉など名だたる人たちが乗船していました。

その中で、長吉は大工役として乗船し、サンフランシスコのメア・アイランド海軍造船所で、往路航海中に嵐で傷んだ咸臨丸のドック修理にあたりました。

### 咸臨丸での足跡

下田開国博物館(下田市)には、長吉が咸臨丸での渡米から持ち帰ったとされる海外土産の、ガラス瓶、水パイプ、アメリカ製皿が残されています。

長吉の写真版(4頁)は、咸臨丸で渡米した時にサンフランシスコで撮影したものといわれています。この時代の写真が残っていることは大変貴重なことで、東京都写真美術館(東京都目黒区恵比寿)に展示されていたこともあるそうです。

## 今日の貿易立国を支えている 海運を育てた人

相原修さんは、インドネシアで、現代版長崎海軍伝習所といえるVEDCA(国立農業教育研究センター)の創設にあたった時から、先祖である蘭学者・石井修三をライフワークとして研究しています。その中で修三と一緒にロシア、オランダの造船を学んだ長吉を知りました。

元教員の相原さんが、最初に赴任したのが河津でした。

同僚に長吉の子孫(4代目)の妻である鈴木すゑさんがいたことなどから、長吉と河津に不思議な縁を感じ、長吉についての研究を始め、その偉大な功績に驚いたそうです。

「長吉は、帆船からスクリーナー船までの船舶動力の変遷すべてと外国ドックの体験にかかりました。政治家や実業家に転身することなく生

涯技術者として人生を全うした人は、恐らく彼一人ではないでしょうか。しかも船大工職に徹して榮達を望まなかったのではないのでしょうか。今日の貿易立国を支えている海運を育てた人です。松下幸之助、豊田佐吉に勝るとも劣らない人です。

また、伊豆の人として、長吉と、石井修三(葦山)、肥田浜五郎(伊東市八幡野)は、互いに支え合いました。戸田、長崎、築地、咸臨丸と(肥田は戸田を石井は咸臨丸を体験していませんが)同じ道を歩んだ3人です。」

相原さんの話を聞き、河津出身の鈴木長吉をさらに誇りに感じました。



長吉を研究した  
**相原 修さん**  
(あいはら おさむ)  
75歳=駿東郡長泉町=

# 時を越え 今も残る足跡

河津の地で生まれ、船大工の道を歩んだ鈴木長吉。近代造船の先駆者として名を馳せ偉大な功績を残した長吉の面影は、今もさまざまな形で残っています。数々のゆかりの品が歴史を物語り、子孫がその志を語り継いでいます。

## 長吉ゆかりの品々

下田開国博物館Ⅱ下田市Ⅱには、長吉の写真版や咸臨丸での渡米から持ち帰ったとされる土産のほかにも、長吉ゆかりの品が多数保管されています。

「観光丸見取之図」は、長吉の直筆といわれています。その精密さからは、長吉の高い

技術をうかがうことができず。

長吉が工部省（明治初期の殖産興業を支えた中央官庁）で仕えたときの辞令には、「月給50両」とあります。これは、当時、同所に仕えた浦賀奉行所の役人より高給という破格の待遇ということです。長吉の実力を物語る貴重な一枚です。

第2回伊豆文学賞（1999年）優秀賞受賞作品「咸臨丸の船匠」（安土肇・著）では、長吉をモデルに、咸臨丸での活躍や、好奇心おう盛で常に向上心を忘れない男の一生が描かれています。鈴木長吉の足跡はこうして語り継がれています。



長吉直筆の観光丸見取之図



長吉に出された工部省の辞令



1. ガラス瓶 2. 水パイプ 3. アメリカ製皿

長吉が持ち帰ったとされる外国土産（1～3）



長吉の子孫（5代目）  
**三澤 辰子さん**  
（みさわ あきこ）  
73歳 = 谷津 =

## 長吉の足跡を 多くの人に知ってほしい。

三澤辰子さんの祖母でう（ちよう）さんは、鈴木長吉の孫にあたります。

辰子さんは、てう（ちよう）さんが、浦賀から浜に移築した長吉の家（今は建て替えて残っていません）で、長吉の娘のとよさんの世話をしながら暮らしていたことを覚えて

います。移築された家は中2階で、当時としてはとても珍しかったそうです。とよさんは、繭玉を紡ぎ、機織りをしていたそうです。

とよさんが98歳で亡くなったとき、辰子さんは小学5年生でした。今思えば、長吉の娘に直接会っていたわけ、そう考えると、1世紀以上前に船大工として活躍した長吉

を、より近くに感じられるそうです。

「今年には万延元年遣米使節150周年にあたり、記念すべき年に長吉のことを町民の皆さんに知っていただけて、とてもうれしい。

私の姉（相良順子さんⅡ三島市Ⅱ）も、長吉が使っていたつづらを今でも管理しています。これからも、下田開国博物館の芳野才利さんや相原修先生、『咸臨丸子孫の会』の皆さんとの交流を通して研究を続けて、長吉のことを語り継いでいきたい。

長吉の足跡をより多くの皆さんに知ってほしい」と、先祖である長吉に思いを馳せていました。

### 参考文献

『蘭学者・石井修三の生涯』 相原修<sup>（註）</sup>／著 羽衣出版(有)／発行  
『星への道』第二回「伊豆文学賞」優秀作品集 静岡新聞社／発行  
収録作品「咸臨丸の船匠」安土肇<sup>（註）</sup>／著 静岡新聞社／発行  
『長崎海軍伝習所』 藤井哲博／著 中公新書  
『夜明けまえ 知られざる日本写真開拓史Ⅱ 中部・近畿・中国地方編』 研究報告書 東京都写真美術館  
『広報よこすか』 第563号6ページ  
『風土誌川津』 No.1 河津町文化財専門委員会／編集・発行  
※相原修さんから、著書『蘭学者・石井修三の生涯』を町立文化の家図書館に寄贈していただきました。貸し出し可能です。



鈴木長吉の墓（右）

### この町で眠る長吉

鈴木長吉は、明治5（1872）年2月28日、享年55歳（数え年）でその生涯を閉じました。長吉は長福寺＝浜＝で静かに眠っています。長吉の戒名は「大量院願船良應居士」。長吉のお墓の隣には、娘・とよの墓がありました

## 編集後記

数年前から話題に上っていても、なかなか手をつけられなかった鈴木長吉について、今回わずかではあります、紐解くことができてホッとしています。

民間広報協力員でも、長吉のことをまったく知らない人がほとんどで、まさにゼロからの出発でした。実際に取材を始めてみると、難航するのではないかとという予想に反して、実に多くの資料が集まり、逆に掲載する内容を絞るのに苦勞したほどです。

紙面の都合もあり、今回は、ほんの少ししかご紹介できませんでしたが、長泉町の相原修先生や谷津の三澤農子さんなどから、貴重なお話を伺うことができて、長吉の功績を知るとともに、長吉が多くの人に愛されていたことを知りました。

これほどの偉業を遂げながらも、町内では無名の長吉について、少しでも知っていただき、誇りに感じていただきたい。また、河津の子どもたちに、歴史上の偉大な人物として、語り継いでいきたいと

思いました。長吉に興味を持つたらずび、図書館で相原修先生の著書『蘭学者・石井修三の生涯』を読んでみてくださいます。長吉とその時代背景について、さらに理解が深まります。

同、感慨無量です。最後になりましたが、取材にご協力いただいた多くの皆さまに、心から感謝いたします。ありがとうございました。

【民間広報協力員一同（渡邊恵美子・渡辺尚志・平川和也・鈴木宏章・稲葉あすみ・安藤圭一・鈴木幸子・高城茂彦・法月真紀）協力・山川智美】

